

# 王朝女流日記文学における「鐘の音」の機能

作品的特質との関わりをめぐって

高野 祥子

## The Function of the Tolling Bell

-One Characteristic of Heian Women's Diaries-

TAKANO Sachiko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

This paper is a study on Heian women's diaries, focusing on the tolling of a bell. The diary has a close relationship with time. People could usually know a particular time by the tolling of a bell, but actually there are few references to the tolling of a bell in these diaries. So it is significant to examine these references, for they represent special moments for the person in the diary.

---

### 一 はじめに—時鐘としての「鐘の音」—

鐘は本来、楽器であるが、王朝文学に描かれるときその多くが寺院の釣り鐘を指し、時を知らせる時鐘として登場する。人々は鐘によって晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六時を知った。そのなかでも王朝文学作品中では、日没を知らせる入相の鐘と晨朝の暁の鐘としての用例が顕著である。

しかし、王朝文学全体における鐘の登場場面を数えてみると、決して多いとは言えない。例えば『源氏物語』や『枕草子』などの長編作品においても、前者が九例、後者が十二例なのである。また、和歌を参看しても、八代集において『古今集』・『後撰集』には鐘の用例は見られず、『拾遺集』の「題知らず／山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」(哀傷・1329・よみ人しらす<sup>(2)</sup>)の一例が鐘の語の初出である。以降の勅撰集において、鐘の用例数は暫増してゆく<sup>(3)</sup>が、それでも時間を常に意識下において生活しているこんにちの感覚からすると、寡少である印象は免れない。そして、王朝人が鐘、すなわち“時”をそれほど著さなかったことについて、あらためて隔世の感を持つのである。王朝人は、時

間の推移に鈍感であったのであろうかと。

しかしながら、この疑問は、たとえば『古今集』が時間を意識して編まれた歌集であることを思い出すことで、たちどころに否定される。春の部立て桜花の日々移り行くありさまを、秋の部立て風の涼しさを感じることで秋の到来に気付くところを描き出した王朝人は、ごく繊細な時間的感覚を持っていたのである。

当然のことながら、王朝人は現代人のように一秒に縛られ追われる暮らしはしていなかった。一秒という感覚自体、近代の科学的論理に基づくものである。したがって、王朝人が意識する“時”とは、現代よりももっと緩やかな時間の流れを意味するということは自明であろう。ところが、鐘の音が知らせる“時”は、季節の推移よりも短い、一日をさらに分割した間隔で人を訪れる。したがって、時のうつろいを緩やかに捉えていた王朝人が鐘の響きに気づき、それを敢えて作品に描出しようとするとき、そこには特別な“時”の意味が付与されることになるのではないだろうか。

ところで、当時の時刻制度を参看すると、陰陽道などの発達とともに様々な時刻制度が考案されていた<sup>(4)</sup>。たとえば、具注曆には太陽の出入りや日月蝕

を軸とした時刻制度が記載されている。また、宮中では水時計によるいわゆる漏刻が用いられていた。

『枕草子』には、

時奏するいみじうをかし。いみじう寒き夜中ばかりなど、こほこほとこほめき、沓すり来て、弦打ち鳴らして、「何の某。時丑三つ、子四つ」など、はるかなる声に言ひて、時の杭さす音など、いみじうをかし。「子九つ、丑八つ」などぞ、里びたる人は言ふ。すべて、何も何も、ただ四つのみぞ杭にはさしける。(272<sup>(5)</sup>段)

というくだりが見られる。夜警に就く左右近衛の者が、漏刻によって知った時刻を宮中に奏し、同時に清涼殿の庭の杭に札をさして時刻を表示する。帝の行幸の際には、漏刻を職掌とする陰陽寮の者たちも帯同したというから、漏刻による時報システムは、ごく卑近な手段として宮中で用いられていたと思しい。

このように、時鐘によらない時刻の報知が、王朝には存在していた。それでは、鐘の音が媒介する“時”とは、それが描かれた王朝文学作品の中で、いかなる意味を持っていたのであろうか。殊に日記文学を語る時、その作品が“日次記”の体裁を取っていなくとも、時間との濃密な関係を意識しないわけにはゆかない。本稿では、日記文学作品の中で鐘の音の描出された場面を採り上げる。そして、そこに内包された作品的特質を読み取ろうと試みるものである。

## 二 讃岐典侍日記の「鐘の音」

### — “生の証”として—

それでははじめに、『讃岐典侍日記』における鐘の音について考察したい。鐘が鳴らされる場面は二例あり、うち一例は本稿で考察する時鐘としてのそれではなく、受戒の折に打ち鳴らす仏具として描かれているので、ここでは除外する。いま一例を以下に挙げる。

明けがたになりぬるに、鐘の音聞こゆ。明けなんとするにやと思ふに、いとうれしく。やうやう鳥の声など聞こゆ。朝ぎよめの音など聞くに、明けはてぬと聞こゆれば、よし、例の、人たちがおどろきあはれなば、かはりてすこし寝入らん、と思ふに、御格子参り大殿油まかでなどすれば、やすまんと思ひて単衣を引き被くを御覧じて、引き退けさせたまへば、なほな寝そと思はせたまふなめりと思へば、起き上がりぬ。(399～400頁)

病篤い堀河帝が、その夜、とりわけ予断を許さぬ容態となり、「ただ消えに消え入らせたまひぬ」(394頁)つまり意識を失うまでの重態となった場面である。意識を取り戻した帝は、「さぶらはんずらんことは、何ごとも今宵さぶらふべきぞ」(395頁)と暗に譲位することをもらす。堀河帝自身が、わが命のわずかであることを悟ったがためである。多くの祈禱僧、看護・見舞いの者、そして讃岐典侍もまたつき従い、「たれも寝も寝ずまもりまゐらせ」(396頁)る。長い夜であった。

その時、夜明けを知らせる鐘の音が聞こえてくる。前掲引用場面は、その瞬間である。讃岐典侍は、鐘の音によって夜が終わったことを知ったのである。白みゆく空の様子や邸内の朝のさざめきなどではなく、鐘の音によって朝に気付いたというところに、讃岐典侍が一心に不予の堀河帝を看護していたさまが看取される。

鐘の音を聞いた讃岐典侍は、「明けなんとするにやと思ふに、いとうれしく」と思う。「うれし」は『讃岐典侍日記』において九例見られ、作品上巻・下巻でその用いられ方が大きく異なる特徴的な語である<sup>(7)</sup>。当該場面を包含する上巻の「うれし」は、このように夜明けとの連関が強い。二者の結びつきは、ここよりも後の場面の、堀河帝が小康状態になる場面より鮮明になる。

「今日しも、すこし夜の明けたる心地しておぼゆれ」とおほせらるるを聞く心地のうれしさ、

何にかは似たる。 (403頁)

堀河帝自身が語るこの場面での「夜の明けたる心地」とは、帝の病が癒えることを喩している。そうした「夜明け」に対して、讃岐典侍は「うれしさ、何にかは似たる」と受けている。すなわち、讃岐典侍の吐露する「うれし」を導引する夜明けとは堀河帝の病氣平癒を意味し、それと同時に、昨日が終了また一日堀河帝の生命があるのだという客観的事実を意味するのである。したがって、夜明けを告げる鐘の音の存在は、讃岐典侍にとって、堀河帝が今日も生きているという「生の証」だったのだといえよう。

本稿冒頭で、王朝人は多くの場合、季節という長いサイクルでの時間についてこそ敏感に感じ取っていたと述べた。だが、一瞬を待たない生老病死の場に臨んで、讃岐典侍の時間的感覚はより研ぎ澄まされていたのであろう。人の命脈と、時を象徴する鐘の音とは、このとき不可分の関係になっていたのである。

『和泉式部集』にも、そうした命脈を象徴する鐘の音への思いを詠んだ和歌がある。

帥の宮にて、題十給はせたる(中略)夕暮  
れの鐘  
夕暮れは物ぞ悲しき鐘の音を明日も聞くべき  
身とし知らねば (和泉式部集 上・356)

世は無常であるから、明日の鐘の音を聞くことはかなわないかもしれない、だから夕暮れの鐘の音は悲しいのです、という大意のこの歌に詠まれた鐘の音もまた、『讃岐典侍日記』と同様に人の生死を象徴している。明日まで生きながらえて、再び鐘の音を聞くことができたなら、それは生命がある証としての鐘の音なのである。

『讃岐典侍日記』における鐘の音は、堀河帝の生を明証するものである。さらに言えば、鐘の音は人智の及ばぬ天意に等しいものとしての機能を、作品内から与えられているのである。そして、讃岐典侍は、こうした天意としての鐘の音をただ一方的に受

け止めるしかできない存在、いわばあるがままの“人”として描出されている。しかし同時に、讃岐典侍のその姿は、そうした天意の下にあっても一心に堀河帝をおもい続ける存在として、作品内に刻み込まれているのである。

### 三 蜻蛉日記の「鐘の音」―書く営為へ―

次に、『蜻蛉日記』の鐘の音について考察する。『蜻蛉日記』において鐘が登場する場面は三例あり、そのすべてが中巻の天禄二年六月の記述、いわゆる“鳴滝籠り”の場面に限られて登場する。

かくてあるは、いと心やすかりけるを、ただ涙もろなるこそ、いと苦しかりけれ。夕暮の入相の声、ひぐらしの音、めぐりの小寺のちひさき鐘ども、われもわれもとうちたたき鳴らし、前なる岡に神の社もあれば、法師ばら読経奉りなどする声を聞くにぞ、いとせむかたなくものはおぼゆる。 (235頁)

またの日、返りごとす。「さてのみやは」とある人のもとに、「かくてのみとしも思ひたまへねど、ながむるほどになむ、はかなくて過ぎつつ、日数ぞつもりにける。

かけてだに思ひやはせし山深くいりあひの鐘に音をそへむとは」  
またの日、返りごとあり。「ことば書きあふべくもあらず。入相になむ肝くたくこちする」とて、

言ふよりも聞くぞ悲しき敷島の世にふるさとの人やなになり (241~242頁)

その暮れてまたの日、なま親族だつ人、とぶらひにものしたり。破子などあまたあり。まづ、「いかでかくは。なにとなどせさせたまふにかあらむ。ことなることあらでは、いと便なきわざなり」と言ふに、心に思ふやう、身のあることを、かきつづし言ふにぞ、いと

ことわりと言ひなりて、いといたく泣く。ひぐらし語らひて、夕暮のほど、例の、いみじげなることども言ひて、鐘の声どもし果つるほどにぞ帰る。(244～245頁)

まず、『蜻蛉日記』の鐘は、三例すべてが夕暮れの、入相の鐘の音であることを確認したい。前節において、『讃岐典侍日記』では堀河帝の、『和泉式部集』356番歌では和泉式部自身の、生命があることを証すものとしての機能を鐘の音が持っていることと述べた。特に、「夕暮れは物ぞ悲しき」と詠まれた和泉式部歌は、入相の鐘の音が象徴する命のはかなさをよく示している。

『蜻蛉日記』の鐘の音にもまた、そうした機能が付与されていると言える。この場面では、ひぐらしの鳴き声、入相の鐘の音、法師の読経の声などを耳にする道綱母の、「いとせむかたなくものはおぼゆる」というわびしい思いが吐露されている。日暮れの情景と道綱母の心情との景情一致をみるこの場面は、入相の鐘がその時刻をことさら印象づけている。「いとせむかたなく」という道綱母の心情は、命のはかなさを想起させる入相の鐘の音が誘引した思いなのである。ここに、自分自身の生のあり方に目を向けていく道綱母の、内観の萌芽を見ることができよう。すなわち、入相の鐘の音は、道綱母の自己照覧への視座が、作品内に湧出したものだと考えられるのである。

さらに入相の鐘の音と、道綱母の意識との関係を考えていきたい。これは、道綱母と「ある人」との和歌贈答である。「いりあひの鐘に音をそへむ」と歎く和歌には、鳴滝で所在なく暮らす道綱母のわびしさがこめられている。相手からの返事は、そうした道綱母に対する共感や慰撫に満ちているが、とりわけ注目したいのは「入相」の語と、和歌に詠まれた「ふるさとの人」という言葉との関係である。

鳴滝に籠る道綱母に宛てて、この人物は自分のことを京の都に住まう人、すなわち「ふるさとの人」と称した。鳴滝と「ふるさと」とは、空間的な隔りがある。しかし、空間的な隔りを超越

して二人に共感性を持たせているのが、「入相」の鐘の音なのである。道綱母が「いりあひの鐘」の音に涙する心象を伝えてきたことをうけて、「ある人」は「入相になむ肝くたくこちする」と「入相」の語を繰り返す。これは、歌語を踏まえただけの表層的な結びつきではない。鳴滝と「ふるさと」とで、空間的な隔りはあるが、「入相」の鐘の音を聞く時間的な隔りはないのだという共感性が内包されているのである。

鐘が鳴らされる晨朝・後夜などという時間の呼称は、仏教における勤行自体をも指すものである。鐘は寺院に属するものであるから、それが告げる時もまた寺院による時刻の概念である。とりわけ、「入相」の鐘の音は、前述したように無常観を付帯した生の証としてのイメージを持っていた。天禄二年六月の鳴滝籠りは、道綱母にとって最も出家願望が強かった時期である。「ある人」は、道綱母との空間的距離があることを意味する「ふるさと」を詠みこみながらも、同時に「入相」の鐘の音に、道綱母と同じく自分もまた切なくなると訴えた。空間的距離は、俗世での尺度である。「ある人」は、鐘の音を鍵語にすることにより、俗世での結びつきに拠らない、仏縁による一層強い結びつきをもって、共感性を説いたのである。

このように、慰撫する人物が道綱母とあたかも同一化したかのように同じ心をもって道綱母に接する姿が、鳴滝籠りでは幾度も描かれている。この場面では、「なま親族だつ人」が道綱母の愁訴に「いとことわり」と共感し、「いといたく泣く」姿や、みやげ物に破子を持参したこと、「例の、いみじげなることども」を言って慰める姿などが描かれている。道綱母の言動がごく簡素に述べられているのは対照的である。

この人物の役割について考えるとき、帰って行った時刻が入相の鐘の音を聴いた後であるという点に、特に注目したい。道綱母の真情を深く理解する人物として描かれるだけなら、「鐘の声どもし果つるほどにぞ」の部分は除き、「ひぐらし語らひて、夕暮のほど、例の、いみじげなることども言ひて」帰りぬ、という記述だけで、一日中親身に語り合ったという

に足りるだろう。また、具体的な刻限を記述するための、単なる時鐘として描かれているとも考えにくい。本稿第一節で考察した時鐘以外による時刻法が、鳴滝籠りの場面にも散見されるからである。<sup>(10)</sup>この人物は、道綱母と二人で入相の鐘の音を聴いた人物なのだ<sup>(10)</sup>と捉えることが肝要であろうと思う。

入相の鐘の音は仏教世界から告げられる“時”であり、無常観を持った生の証である。ともに入相の鐘の音を聴くということは、道綱母のわびしい境遇に深く共感するのみならず、入相の鐘の音という仏の縁で結ばれていることを示すものである。木村正中は、この場面の和歌贈答について、道綱母と他者との贈答ではあるが、「一種の内的対話ともいべき独自の機能が与えられ」<sup>(11)</sup>と述べている。入相の鐘の音を紐帯とした他者によるそうした機能は、

この場面にも言うことができよう。兼家との疎遠な結婚生活や時姫に対する妻としての敗北感に満ちた状況下で、道綱母の孤絶感は深まっていた。鳴滝に参籠し入相の鐘の声を聴く道綱母からは、憂き世に左右されない、他者との絶対的な結びつきを模索しようとする思いが読み取れるのである。

鳴滝籠りが、その後の道綱母の心象形成へいかに関わっていったかという問題は、作品の本質自体を問うことへもつながるので、いま限られた紙数では断じられない。だが、後論への布石として、鐘の音との関わりから本節の結論を述べておきたい。すなわち、鳴滝籠りにおいて、夫である兼家との結婚生活に苦悩する道綱母の姿の中には、自らを救済しようという意識の片鱗を垣間見ることができる。その片鱗の存在を明証するものこそが、鳴滝籠りで繰り返し描かれる「入相の鐘の音」を聴く道綱母の姿である。

鳴滝籠りは、兼家との不如意な結婚への諦念や、静謐の境地へと直ちに結実するもの<sup>(12)</sup>ではなかった。それは、この後も道綱母の煩悶が繰り返されることから理解される。また、子息道綱や養女への期待を支えるものの一つとして、俗世での栄達希求が挙げられよう。鳴滝への参籠では払拭しきれない俗世への情念が、道綱母には依然として憑いているのである。

しかし、そういったものもすべて包含して、人間としてのみこんでいく萌しを、鐘の音を聴く母の姿に見る。鐘の音に無常観を抱き、その感慨を他者との共感性として主体的に捉えたのは、ほかならぬ道綱母自身であるからである。彼女はやがてそうした思いを「かげろふのにき」として書く。その書くという営為に、我々は道綱母の自己照覧の結実を認めるのである。

#### 四 更級日記の「鐘の音」—老いることの意味—

『更級日記』の鐘の音は四例見られ、四例とも和歌に関わる語として用いられている。

かへる年、むつきの司召に、親のよろこびすべきことありしに、かひなきつとめて、同じ心に思ふべき人のもとより、「さりともと思ひつつ、明くるを待ちつる心もとなさ」といひて、

明くる待つ鐘の声にも夢さめて秋のもも夜の心地せしかな

といひたる返事に、

暁をなにに待ちけむ思ふことなるともきかぬ鐘の音ゆゑ (308頁)

世の中むつかしうおぼゆるころ、太秦にこもりたるに、宮にかたらひきこゆる人の御もとより文ある。返事きこゆるほどに、鐘の音の聞こゆれば、

しげかりしうき世のことも忘れず入相の鐘の心ばそさに

と書いてやりつ。 (350頁)

は万寿二年、孝標女十八歳の記事である。父の任官が叶わなかった折の贈答に、歌語として鐘の音が詠みこまれている。孝標女は、「親となりなば、いみじうやむごとなくわが身もなりなむ」(314頁)と、このとき国司として失職中の父が任官することによって、わが身もまた結構な身分に

なれるだろうという望みを抱いており、除目に外れたことは大きな落胆となったであろう。

しかし、その贈答を見ると、鐘の「鳴る」と任官が「成る」とが掛けられており、言葉遊び的要素が強い。また、明け方の鐘の音に落胆の思いが備わるのは、王朝文学では恋歌や恋の場面がほとんどである。<sup>(13)</sup> 任官という俗な内容を話題にしながらも、恋愛のモチーフに使われがちな暁の鐘の音を取り入れた贈答であるところに、深刻さは見られない。除目に外れた落胆の思いをともにしているが、それが自己の内省にまで深化していないのである。は、孝標女がまだ光源氏や浮舟に思いを馳せ、夢見がちに過ごしていたみずみずしい世代にあった時の贈答であり、鐘の音を鍵語とした言葉遊びは、彼女のそうした若さを反映しているといえよう。

いっぽう は、永承五年、孝標女が四三歳のときの記事とされている。太秦に籠った折のある人への返歌である。この頃孝標女は、少女の頃からの物語文学への夢が潰えながらも、結婚や宮家への出仕を経て、彼女なりに生活の中に充足感を見出していたものと思われる。橘俊通との遅い結婚は、「その有様の、たちまちにきらきらしき勢ひなどあんべいやうもなく、いとよしなかりけるすずる心にて、ことのほかに違ひぬる有様なりかし。」(328~329頁)と、これまで抱いてきた理想との間に大きな落差があり、孝標女は幻滅したのだった。しかし、こうした現実と直面した孝標女は、むしろ現実を見据えた生き様を希求するようになるのである。<sup>(14)</sup> の少し前の場面に見られる「なにごとも心にはなほぬこともなきままに」「さしあたりて嘆かしなどおぼゆることどもないままに」(349頁)というくだりは、孝標女のそうした境地を示している。

孝標女と俊通との結婚について、その生活が失望で始まっていること、また本作品中に夫婦の仲についての記述が希薄であることなどから、の「世の中むつかしう」が夫との不仲を意味するととる説が少なからずある。<sup>(15)</sup> しかし、の詠草は作品の終末部に近い場面に置かれており、孝標女が

至る前述の境地から鑑みると、そうした解釈では作品自体の基調に絡み合ってこないように思われる。俊通の死に際して、「九月二十五日よりわづらひ出でて、十月五日に夢のやうに見なくて、思ふ心地、世の中にまたたぐひあることとおぼえず。」(356頁)以下に続く孝標女の悲しみの思いからは、理想の男君との乖離は否めなかったものの、やはり孝標女にとって俊通はこの上もなく大切な存在だったのだということが肯首されるのである。

また、和歌に詠まれた「うき世」の解釈についても同様であり、ここも家庭生活や宮仕えという限定された世界を指すものではないだろう。太秦広隆寺という俗世から離れた所に籠っているながらも、「しげかりしうき世のことも忘れず」と対比させていることから、もっと広義の、家庭生活や宮仕えをも包含した俗世全体を指すものと考えられる。<sup>(16)</sup>

「しげかりし」と詠む孝標女は、鐘の音で人生を顧み、俗世での生活に思いを馳せる。上京の途路で見聞したことを少女らしい感動をもって描いた孝標女は、父の任官叶わぬ不遇にあっても精神のうおいを失わなかった。そして、仏縁の色濃い鐘の音を、機知で贈答することで深刻さを吹き飛ばすような活力を持ち合わせていた。しかし、そうした物語世界に耽溺していた若い頃の孝標女とは異なる、鐘の音への深刻な感受が、「しげかりし」の詠草には見られるのである。

この時代は、四十歳を過ぎると老齢とされた。年を経て、老女となった孝標女の感性の変容を知り、我々は改めて「時」が孝標女から奪い取ったもの、そして孝標女に与えたものの意味を知る。本作品末の姨捨詠には、鐘の音の歌語は入っていない。しかし、その響きは姨捨詠草のはしばしから聴こえるだろう。

## 五 和泉式部日記の「鐘の音」—未来への決意—

さて、これまでに考察してきたことを軸として、

最後に『和泉式部日記』における鐘の音について考えたい。

『和泉式部日記』には和泉式部、作中呼称「女」の物思いの姿が繰り返し描かれている。「九月二十日あまりばかりの有明の月」の頃、つまり晩秋から初冬にかけての有明の月を背景として、女は眠れないまま宮へ宛てる手習文を書き綴る場面が作品中盤にあり、その中に鐘の音が現われてくる。かなりの長文なのだが、以下、全文を引用する。

風の音、木の葉の残りあるまじげに吹きたる、  
つねよりもものあはれにおぼゆ。ことごとしう  
かき曇るものから、ただ気色ばかり雨うち降る  
は、せむかたなくあはれにおぼえて、

秋のうちは朽ちはてぬべしことわりの時雨  
にたれが袖はからまし

嘆かしと思へど知る人もなし。草の色さへ見  
しにもあらずなりゆけば、しぐれむほどの久し  
さもまだきにおぼゆる風に、心苦しげにうちな  
びきたるには、ただ今も消えぬべき露のわが身  
ぞあやふく、草葉につけてかなしきままに、奥  
へも入らでやがて端に臥したれば、つゆ寝らる  
べくもあらず。人はみなうちとけ寝たるに、そ  
のことと思ひわくべきにあらねば、つくづくと  
目をのみさまして、なごりなう恨めしう思ひ臥  
したるほどに、雁のはつかにうち鳴きたる、人  
はかくしもや思はざるらむ、いみじうたへがた  
き心地して、

まどろまであはれ幾夜になりぬらむただ雁  
がねを聞くわざにして

とのみして明かさむよりはとて、妻戸を押し開  
けたれば、大空に西へかたぶきたる月のかげ、  
遠くすみわたりに見ゆるに、霧りたる空のけし  
き、鐘の声、鳥の音ひとつにひびきあひて、さ  
らに、過ぎにし方、行末のことども、かかる折  
はあらじと、袖のしづくさへあはれにめづらか  
なり。

われならぬ人もさぞ見む長月の有明の月に  
しかじあはれは  
ただ今、この門をうちたたかする人あらむ、い

かにおぼえなむ。いでや、たれかかくて明かす  
人あらむ。

よそにてもおなじ心に有明の月を見るやと  
たれに問はまし (49~50頁)

手習文には思い悩む女の姿とともに、五首の歌が  
詠み込まれており、やがて文を受け取った宮も五首  
の歌で応じる。それゆえ当該場面は先学によって五  
首贈答の場面と称され、複数の歌をいちどきに贈答  
するという他作品には見られない特異性が論じられ  
てきた。そして、それとともに、手習文における情  
景に矛盾があるものとして、これまでに考察されて  
きた。女が手習文に綴ったときの天候は、波線部「こ  
ことごとしうかき曇るものから」<sup>(17)</sup>「しぐれむ程の久し  
さもまだきにおぼゆる風に」<sup>(18)</sup>に見るように、時雨ま  
じりの天候である。しかし同時に、手習文には実線  
部「霧りたる空のけしき」の中に「大空に西へかた  
ぶきたる月のかげ、遠くすみわたりに見ゆる」よう  
な天候でもあったとも書かれている。つまり、手習  
文の中に書かれた天象には、矛盾があるということ  
になるのである。

しかし、天象の矛盾は中古の他作品にも見ること  
ができる。『更級日記』の冒頭、孝標女一家の京への  
旅立ちの場面では、たいそう深く霧が立ち込めてい  
る中、「うち見やりたれば」(280頁)、つまり遠方か  
ら見渡すと薬師仏が立っているのが見えたとある。  
同様の例は『源氏物語』にも見られる。

明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月  
いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、  
わづかなる木陰のいと白き庭に薄く霧りわたる、  
そこはかたなく霞みあひて、秋の夜のあはれに  
多くたちまされり。……

出でたまふほど、人々のぞきて見たてまつる。  
入り方の月いと明きに、いとどなまめかしう  
きよらにて、ものを思いたるさま、虎、狼だに  
泣きぬべし。 (「須磨」163・165頁)

引用場面は、須磨に下向する光源氏が左大臣家を  
訪ねる場面である。光源氏は「夜深う出でたまふ」

のであるが、そこに明け方の月である「有明の月」がいとをかしといっているのには矛盾があるし、「入り方の月」が「いと明き」と、光々としたイメージを持つのも不合理である。

これら矛盾する天象について、先行研究では早くに五十嵐力が指摘した。氏は情景の矛盾を作品における観念の空疎さ、ミスであるとし、『和泉式部日記』のみならず中古文学の作家たち全体に、状況の一貫性についてもう少し目を向けて貰いたかったという読みをしている。また、全集系本や遠藤嘉基は、一見不合理に見える情景は、不安定な時雨の折を描いたものであるから実景としても矛盾はないという説を出した。

それでは、本稿としてはどうみるか。私は、鈴木一雄の全講や野村精一の集成などの、女の幻想としての風景という説をとりたい。手習文では、眠れずに室内で煩悶している女と、妻戸を押し開け、外の世界を見渡していく女とがいる。つまり、手習文に描かれた女の姿は前半・後半によって大きく異なるのである。そして、手習文前半では時雨がちであつた空が、後半部とおぼしい「とのみして明かさむよりはとて」という女の心境の変化とともに澄んだ月が見え、鐘の声や鳥の音が響き渡ってくる。本作品が 超越的視点 を持ち、物語的特徴を有していることを考えれば、この景情の一致は至極当然のことといえよう。

さて、手習文を前半・後半に分ける上で、すなわち手習文にあらわれた女の心象の変化をみる上で最も象徴的なのが、「鐘の声」の機能である。手習文の前半では、自らの艶聞などで宮のもとに身を定めることのならない女の嘆きが雁の声によってあらわされている。しかし女は、手習文後半に入るところで「ただ雁がねを聞くわざにして、とのみして明かさむよりはとて」と、妻戸を開く。すると、先ほどまでの時雨めいた陰鬱な眺めではなく、澄み渡った景色が広がっている。そしてそこに、夜明けを知らせる「鐘の声」が響いてくるのである。

これら女の心象の変化は、手習文における「さらに、過ぎにし方、行末のことども、かかる折はあらじ」という過去・現在・未来の時間意識とそのまま

符合するものである。手習文に書かれている有明の頃は、夜から朝に向かう時間であるとともに、女の心象における過去から現在、そして未来への生き方を表わすものであろう。それはすなわち、定まりない宮との関係を含む我が身を、過去から現在として振り返り、未来へ向けての自分の生き方に目を開いてゆくということの示唆にほかならない。女はそうした手習文を宮に送ることで、宮への思いを宣誓したのである。

さらに、鐘の音によって象徴されている女の生き様にも言及したい。絶対的な身分差を前に、宮の愛情を信じて前向きに運命を切り開いていこうとする決意が、手習文の中に見られる。宮側の視線からは「人の言ふほどよりもこめきて、あはれにおぼさる。」(38 頁)「人の便なげにのみ言ふを、あやしきわざかな、ここに、かくて、あるよ」(53 頁)と頼りなげな様子がしばしば活写される女であるが、彼女は自らの未来を自ら決意できる意思を持った女でもあった。また、そうした強さと、鐘の音が示す未来への思いを綴ったものが、女からの手習文なのである。

夜明けを知らせる鐘の音は、女の心の夜明けを効果的に表徴する景情一致の表現であり、そこに『和泉式部日記』の物語的日記文学としての特徴がよく出ている。状況的に矛盾を含み持ちながらも、景物などを女の心象に沿わせて描いてゆく描写の中には、当然「鐘の声」も含まれている可能性がある。すなわち「鐘の声」の存在自体が虚構であったという可能性は否定できないのである。しかし、手習文に「鐘の声」は書かれた。女は、鐘の音を手習文に書くことを選び取り、それによって宮に心の夜明けを告げたのである。帥宮との愛情をその根幹とした本作品の立脚点は、情景と女の心の中に同時に存在する鐘の音の中に、こうして認めることができるのである。

## 六 おわりに

人生の中から、ある“時”を切り取って形象化した日記文学作品において、鐘が知らせる“時”とは、



究極につきつめた鮮やかな一瞬である。たとえば、『和泉式部日記』がわずか十か月分を描いた作品だとはいえ、そこには毎日六点鐘が響いていたはずなのである。それにもかかわらず、鐘の音は作品中、わずか一回しか見られない。鐘の音の描出、すなわち、ほんの一瞬の思いの形象化は、いうまでもなく、その瞬間が作品において重要な意味を持つからである。

また、夜明けの鐘の音で、『讃岐典侍日記』があたかも鐘の音が運命を決めているかのように捉えているのに対して、『和泉式部日記』は鐘の音を未来への決意として扱った。どちらが前向きで立派な生き方かという二元的考え方は愚論である。いずれの作品も、鐘の音の聴こえた瞬間が、仏縁で約束されたかけがえのない一瞬なのである。すなわち、鐘の音とそれに伴う一瞬の捉え方が、各々の日記文学作品の本質に大きく関わっていると結論づけられるのである。

本稿では、日記文学において鐘の音に象徴される切り出された一瞬の内実を考究した。日記文学を論じる上で、時間意識との関わりを問うことは不可避であり、さらなる考察が必要であることは言うを待たない。後論にてさらに考えたい。

## 注

- (1) 『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、1995)。
- (2) 『拾遺和歌集』(『新日本古典文学大系七』、岩波書店、1990)。仮名・漢字表記は私に改めた。
- (3) 王朝の主な文学作品における「鐘」の用例一覧を、本稿末に別記した。
- (4) 以下、時刻制度については、橋本万平『日本の時刻制度増補版』(塙書房、2002)による。
- (5) 本文の散文作品引用は、『新編日本古典文学全集』(小学館)による。
- (6) 延喜式「陰陽寮」には、「凡行幸。陪從属已上二人率陰陽師二人。漏刻博士一人。守辰丁十二人。直丁一人供奉。」(『新訂増補国史大系』、吉川弘文館、1937)と規定されている。
- なお、「漏刻博士」以下の職制については、養老律令「陰陽寮」の項に「漏刻博士二人。掌。率守辰丁。伺漏刻之節。守辰丁二十人。掌。伺漏刻之節。以時擊鐘鼓。使部二十人。直丁三人。」(『律令』、岩波書店、1994)と記されている。
- (7) 『讃岐典侍日記』上巻において、「うれし」四例は、すべて堀河帝の病状平癒に対する讃岐典侍の心内語として用いられている。対して下巻の五例は、その対象となる人物も用いられ方も様々である。本作品における上下巻の内実を汲み取る上で、注目すべき語であろう。
- (8) 『和泉式部集・和泉式部続集』(岩波文庫、1983)。和歌番号は本書による。
- (9) 大倉比呂志「蜻蛉日記」の夢と信仰」(『女流日記文学講座第二巻』、勉誠社、1990)。
- (10) 「初夜行なふとて、戸おし開けて念誦するほどに、時は山寺わざの、貝四つ吹くほどになりたり。」(229頁)、「時は八つになりぬ。道はいと遥かなり。」(231頁)等。
- (11) 木村正中「蜻蛉日記の和歌」(『中古文学論集第二巻』、おうふう、2002)。
- (12) 吉田幹生「人の心 から 我が心 へ—『蜻蛉日記』試論—」(『中古文学』七四、2004・11)。
- (13) 『源氏物語』の八の宮薨去の場面に、「……鐘の声かすかに響きて、明けぬなりと聞こゆるほどに、人々来て、「この夜半ばかりになむ亡せたまひぬる」と泣く泣く申す。」(「椎本」188頁)という場面があるが、稀有な例である。
- (14) 伊藤博・宮崎莊平『王朝女流日記文学』(笠間書院、2001改訂四版)。
- (15) 犬養廉『新編日本古典文学全集』(小学館、1994) 原岡文子『更級日記』(角川ソフィア文庫、2003)等。また、宮仕え先での煩わしい出来事とする説(吉岡曠『新日本古典文学大系』、岩波書店、1989等。)もあるが、直後の場面に気ままな出仕の情景が描かれているので、そぐわない。
- (16) 宮崎莊平「更級日記の作品論補説」(『平

安女流日記文学の研究続編』(笠間書院、1980)

- (17) 手習文の地の文「ただ今も消えぬべき露のわが身ぞあやふく、草葉につけてかなしきままに」が本作品成立時には独立した一首であったという玉井幸助「和泉式部日記中の五首贈答歌」(『文学』二、1934・1。のち『和泉式部日記新註』(世界社、1949)に抄録。)以来の説に従う。したがって、四首しか見えない手習文中の女の和歌を稿者は五首と数え、また本作品全体の歌数を一四五首(女と宮とで贈答しあう連歌四句は二首と計上)とする。
- (18) 月と霧との共存について、 実景としては不合理であり、叙述上の矛盾であるとする説(五十嵐力『昭和完訳和泉式部日記』、白鳳出版社、1947) 実景として容認し得るとする説(遠藤嘉基『新講和泉式部物語』、塙書房、1962) 観念的・幻想的光景として捉える説(円地文子・鈴木一雄『全講和泉式部日記改訂版』、至文堂、1994。初版 1965。野村精一『新潮日本古典集成』、新潮社、1981)と、諸説論じられてきた。
- (19) 「雁」は「仮」に通じるものであり、また渡り鳥であることから無常のイメージを持って王朝の文学作品には盛んに用いられた。和泉式部にも「観<sup>スレバ</sup>身岸<sup>ヲ</sup>額<sup>ノ</sup>離<sup>ヒニレタル</sup>根草、論<sup>ヲ</sup>命<sup>スレバ</sup>江<sup>ノ</sup>頭不<sup>ニル</sup>繫舟」の歌群に「例ならず寝覚めせらるる比ばかり空とぶ雁の一こ糸もがな」(和泉式部集・上・297)という詠草がある。

注(2)「鐘」用例数

作品名	数
土佐日記	0
蜻蛉日記	3
和泉式部日記	1
紫式部日記	0
更級日記	4
成尋阿闍梨母集	0
讃岐典侍日記	1
枕草子	12
伊勢物語	0
大和物語	0
平中物語	0
竹取物語	0
宇津保物語	1
落窪物語	0
源氏物語	9
浜松中納言物語	1
堤中納言物語	0
夜の寝覚	0
狭衣物語	2
とりかへばや物語	0
栄花物語	14
古今和歌集	0
後撰和歌集	0
拾遺和歌集	1
後拾遺和歌集	2
金葉和歌集	2
詞花和歌集	3
千載和歌集	7
新古今和歌集	11
和泉式部集・続集	6

(Received: May 31, 2006)

(Issued in internet Edition: July 1, 2006)